

自信過剰でいいんじゃないの

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

サッカーワールドカップでの「西野ジャパン」の活躍に心底興奮した。

海外からの前評判は知る術も無かったが、開始前から我が国のマスコミは、ハリルホジッチ前監督の電撃解任後、突如就任した西野朗監督に対しては、「格好良いだけで（褒め言葉でもあるが）指導力はない」、選拔選手には「史上最弱のチーム」、平均年齢28歳をもって「おっさんジャパン」などと、言いたい放題の罵詈雑言を浴びせ続けていた。そして、つられた国民は、すっかり白けたままで今大会がスタートした。

ところがどっこい、コロンビアに見事な勝利を収め、セネガルと引き分け、ポーランドには敗れたものの、凄まじい執念でバスプレーを繰り返し、フェアプレーポイントが評価されたうえで決勝トーナメントに進出。最終的には強豪国ベルギーに逆転負けを喫し帰国の途に着いたが、格上チーム相手に全ての試合で善戦。その不屈な精神に「ありがとう西野ジャパン」と、今もって国を挙げての賞賛が続いている。

自分も、その一人であるが、今回日本人は、あまりにも調子が良すぎた。小さい頃に親や先生に言われた言葉「人の悪口を言うな」は重い。

この4年に一度の、誰もが自国の勝利を期待して止まないサッカーワールドカップに代理戦争のイメージを持ってしまふのは自分だけではないと思う。そこで最近の日本人は、いつの間にか勝負ごとに対して、初めから妙に冷静で弱腰になつてきたように思える。

極端な例えではあるが、日清戦争や日露戦争、太平洋戦争の勃発時や「ジャパン・アズ・ナンバワン」と世界に経済競争を挑んでいたバブル期の頃の日本人は、理屈抜きに、もつと強気であつたはずだ。「神風」の国であることを忘れてはならない。

そして、あらゆる勝負事には、無責任な期待や、無用なプレッシャーが失敗を招くことも事実であり、それらが薄かったことが今回の活躍に繋がったのかもしれないが、これからの時代、全てのことに対して、日本人はもつと自信過剰であつてもいいのではと思う。

他に感じたこと。人口は国力の源であるが、若者が減少してきたとはいへ、日本は、まだまだ人口大国である。そのなか、我が国に比べ、遙かに人口の少ない小国が、粒ぞろいで強豪国であるのは、運動能力が高い男たちが、他のスポーツを嗜む選択肢が無く、皆が

サッカーに向かっていること。移民のサクセスストーリーの場に成り得ているからであろう。

そして、選抜されたアスリートの気持ちの一つにするのは、やはり言語の力ではないかと思う。オフィシャル言語は英語であるものの、32カ国が参加した世界大会、ピッチの上や応援席、プレス現場で、いったい何十種類の母国語が使われていたのであろうか。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所（名古屋分院） <http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院） <http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

